

氏 名 唐 権

学位（専攻分野） 博士(学術)

学位記番号 総研大甲第566号

学位授与の日付 平成14年3月22日

学位授与の要件 文化科学研究科 国際日本研究専攻

学位規則第4条第1項該当

学位論文題目 海を越えた艶事

中国と日本の人的交流 1684～1894

論文審査委員 主査教授 白幡 洋三郎  
教授 園田 英弘  
助教授 劉 建輝  
教授 上垣外 憲一（帝塚山学院大学）  
学長 大庭 脩（皇學館大学）

日中関係史、あるいは日中文化交流史研究の基本課題は、両国共有の過去にあった様々な局面を、歴史の本来の面目に従って再現し、そして意味を賦与することである。従来の研究において、日中交流は主として「文明摂取のための運動」、あるいは通商貿易の文脈において論じられてきた。それに対して、本研究ではまずホイジンガの「遊び」論に依拠しつつ、この二つの領域以外に、もう一つ、即ち「風流」という領域が日中交流の中で大きな比重を占めていたことを強調した。具体的にいうと、17世紀末期から19世紀末期までの二百年間、数多くの中国人と日本人が交流・接触していた過程の中で、様々な男女の艶事が演出され、それが当時両国間の人的交流の主要な形態であった。本論文の中心課題は、即ちこれらの艶事に焦点を当て、そのような現象を生み出す歴史背景を探り、その様相を描き、さらに日中関係における位置付けを分析することである。

本研究では考察範囲を、主として近世以降両国の交流が集中的に行われていたいくつかの「場」に限定し、特に江戸時代の長崎と19世紀後半の上海を重点に扱った。長崎と上海が、それぞれ江戸時代と近代において日中間の交易と通商の中心地として、人的交流がもっとも活発に行われた場所であった。そして両都市で行われていた両国間の交流は、時代と地域の差により様相が大きく異なったものの、歴史的連続性を有していた。本研究の主要な対象は、まさに長崎と上海を舞台に活躍していた交流の担い手たち—長崎へ渡った江南の人々、上海へ渡った「東洋妓女」、それから明治日本へ旅した近代上海の文人である。

第一章は、明から清への王朝交替、また1684年以降「唐人貿易」が大規模に展開し始めたという歴史的な変化を背景に、長崎へ渡った中国人と丸山遊女との関わりを手がかりにして、当時の中国人にとっての長崎の位置付けを再考した。その中で、まず指摘したのは、当時長崎にいた中国人の中に、単なる貿易のためではなく、遊樂を目的とした人も多くいたという事実である。これらの人々の存在、また唐人屋敷に漂っていた享樂的、エロチックな雰囲気がまさに「唐人貿易」に隠されたもう一つの側面であり、それはまた「唐人貿易」を持続させた重要な要素に他ならなかった。そしてこの現象を生み出した背後には、中国の海外交通の発達と隆盛、江南地域の娯樂業の衰微、房中術に現れた中国人の「遊女幻想」、幕府の唐人歓待政策など多くの理由が考えられる。これらの要因がもたらした結果として、長崎は単なる貿易都市ではなく、近代以前の東アジア世界における唯一の国際的な「遊興都市」となった。さらに、中国人と遊女との関係は、近代以降の日中関係にも影響を与え、その延長線上にあるのは、幕末上海へ渡った「東洋妓女」たちであった。

第二章は近代上海の「東洋妓女」を対象とした。清末上海で出版されたさまざまな都市案内書、それから「花榜」といった遊女の評判記や番付け、さらに日本外務省の文書などの資料を発掘し、同時に戦前日本の「法人海外発展史」の研究成果を参考しつつ、今まで殆ど忘れ去られた「東洋妓女」たちの歴史像を浮き彫りにし、彼女たちをめぐる中国と日本の葛藤と軋轢の歴史を解明しようとした。本章の具体的な内容については次のように構成する。まず近代上海が持っている文化的特質および上海に置かれた「東洋妓女」の社会的性格を説明し、それから明治維新以降「東洋妓女」が上海へ渡った経緯、人数の変遷、「東洋茶館」の

増減と分布、「東洋茶館」内部の様子など「東洋妓女」に関する様々な局面を取り上げ、その一つの局面に関する資料を解説、分析した上、当時の日中交流の中に彼女たちが如何に大きな存在であったかを証明した。また、上海の人々が創った「東洋妓女」イメージと関連して、特に強調したのは、「東洋妓女」が単なる春をひさぐことを生業とする存在ではなく、詩を創り、画を描き、音楽を演奏する彼女たちが上海の男たちの「風流」追求の対象であった、ということである。最後に、1880年代から20世紀初期に至る間、日本政府が上海の日本娼妓を法律で統制する過程を分析し、近代中国と日本の衝突が文化的相克という側面を有することを指摘した。

「東洋妓女」とほぼ同じ時期に登場した上海文人に対する考察は第三章の主題である。日中間における蒸気連絡船の登場、そして1860年代以降拡大しつつあった両国の交流は、中国文人たちの文化創造の活動にどのような影響をもたらしたのだろうか。この章では一人の文人・王韜に焦点をあて、彼と日本との交流を追跡した。その中で特に注目したのは、この交流の多様性、またその多様性に対応する彼の思想の多面性である。啓蒙思想家としての王韜は日本についての知識を吸収し、日本の西洋化に関心を寄せていた。そして日本の西洋化政策に対して、彼は常にそれを中国の「洋務運動」と比較しながら、時には称えたり、時には貶したりした。一方、「儒教的民族主義者」として彼は早くも日本の脅威を意識し、独自の「海防論」を主張しながら、つねに明治政府の拡張主義を強く批判する姿勢を示していた。他方、文人としての彼は、日本を憧れの仙境とし、吉原や柳橋を舞台に数々の「風流」を演出した。彼はまた政治見解上の対立を超越して数多くの日本人と交わりを結び、そして文人同士としての親近感と連帯感から出発して、中国と日本の「同文同種」を主張した。文人としての彼はさらに文学作品の創作を通して一種の中国的「日本趣味」を発展させたのであった。王韜と日本との関係の多様性と多面性は言ってみれば近代中国と日本の複雑な関係そのものの反映に他ならない。

風流な艶事として現れた壮大な交流。中国と日本にとって、それはそれぞれの歴史に特筆すべき大きな出来事であった。さらに、人々の自由な精神と豊かな真情が溢れた交流を通じて、両国の間には、新しい国際的な文化領域が出来た。それら艶事の歴史的意義はまさにここにあるといえよう。

## 論文の審査結果の要旨

本論文は近世・江戸時代前半期から近代・明治中期までのおよそ200年間における日中関係史を、とくに人的交流の観点から論じたものである。日中関係史は江戸時代を対象にした場合は長崎を窓口とする唐人貿易史として、利潤追求をめぐる経済上の日中関係の推移を解明する研究領域として行われてきた。また、明治時代を対象とする場合は、日本近代化の諸側面を学習する留学生などを中心としてきた。これに対して本論文のタイトルの中に含まれている「人的」とは政治や経済活動に従事する役割としての人間からではなく、生活者としての人間から生まれるものを指し、「交流」とは生身の感覚を持つ男女の交流を意味する。

対象とする時代の日中交流には3つのレベル、すなわち①生糸、薬種などの物資の交易、②書籍、絵画などによる文化の交流、そして③観光・遊興による人的交流、が存在するとした上で、これまでほとんど取り上げられなかった遊興による交流に注目する。人と人の間を、物化された関係ではない語の本来の意味でのヒューマンな関係からとらえ、日中交流史を構築しようとした挑戦的な研究である。

第1章では清朝政府が展海令を公布した1684年以降の唐人貿易の時代を対象としながら、その中で貿易外の人的交流を、長崎への唐船来航数や中国人による丸山遊女との遊興を記した詩文、日記等をもとに明らかにしている。江戸中期、上海から長崎までの海路が最短で1週間、上海・北京間が陸路で40日を要したことなどから、江南地域から長崎への観光・遊興の旅は交通の面からも相対的に容易だと受け取られ、また長崎遊女の評判からも強く促されていたとする。さらに中国からのこの早い「国際観光」は、明代に始まる国内観光の隆盛に基礎を持つという興味深い分析を提出している。

第2章では幕末から1894年に起こった日清戦争までの日本人女性、いわゆる「からゆきさん」のとくに上海「進出」を、日中双方から分析している。これまで取り上げられてこなかった中国の文献・画像資料を用いて、日本女性が「東洋妓女」と呼ばれ、単なる遊女ではなく、芸能に優れ詩文に通じた教養人とみられていたこと、また彼女らが、中国文人の伝統である「風流」を求める趣味に応えることで、日中間の交流の一側面を担ったとする。

第3章では清末の代表的な上海文人である王韜（1828～97）を取り上げ、彼の日本旅行記を中心とする著作の中から、近代の一中国人がまじめに日本近代化の観察をおこなう一方、日本の文人との遊興を媒介として作り出した日中の共通した「遊び」の世界を描き出し、同時に当時の上海に広く見られた「日本趣味」の様相を浮き彫りにしている。

本論文は、中国出身であることの利点を生かし、従来用いられなかった中国側の文献・画像資料を駆使して、日中関係史に新たな研究の方向を示そうとする意欲的な論文として高く評価できる。また、中国人をホモ・エコノミクスとしてとらえた従来の唐人貿易史に加えて、ホモ・ルーデンスとしての中国人がかかわる「日中文化交流史」

を構想した画期的な業績である。ともすれば日本で用いられている研究の資料や手法にとらわれることが多かった中国における日本研究にも刺激を与えるであろう。

資料の取り扱いに未熟な点が散見され、文献の読みにももう一步踏み込みが足りないとの指摘が審査委員から出されたが、そのような欠点を補うに十分な斬新さを備え、国際的日本研究にとっても示唆に富む内容を持つ論文であり、博士の学位に十分値すると判断した。